

哲学者のガブリエル・マルセル（一八八九～一九七三）は、最晩年に語り下ろされた自伝『道程』で、自らの信仰する態度にふれながら、つぶやくようにこう言った。「私は、私の信じているものを知らない」。何を信じているか、その全貌を知り得ない、人は、何を信じているかを十分に語ることはできない、というのである。だが、その一方で、信じてと人が口にするのは、その対象のすべてを知覚し得たときではなく、おぼろげながらであったとしても何か確かなものを感じるときであることも、この一言は語っている。

『道程』はマルセルにとって最後の著作となった。この著作で彼は、哲学的論考では語り尽くせなかった非合理的経験や内面的な出来事を、ありのままに語った。自伝がもう少しで語り終わろうときだった。マルセルはふと、畢竟「実存」とは、人間が息を引き取るまでの話ではないのか、と呟くように言う。「実存主義者」は、この世でいかに生きるかを問うのかもしれないが、根本問題は、「実存」の先にあるのではないかというのである。

二十世紀フランスで、実存主義が、背後に無神論を潜めながら時代を席卷する勢いで広がったことがあった。その中心にいたのがサルトル（一九〇五～一九八〇）である。マルセルは、サルトルと並んで語られることが多

私は、 私の信じているものを 知らない

若松英輔

wakamatsu eisuke

く、サルトルが無神論を標榜していたのに対し、マルセルは「キリスト教的実存主義者」と呼ばれることがあった。だが、この呼称をマルセルは断乎拒否する。マルセルは、信仰者である自分がどうして実存主義の列に連なることができるだろうかと語ったことがある。だが、そうした発言も彼の内心の真実を語ったものではなかった。

生涯を賭してマルセルが思索したのは、「実存」ではなく「現存presence」である。一九六六年マルセルは来日し、小林秀雄と対談し

ている。このときマルセルはうまく説明できないが、と断りながら、「現存」的人間の典型として、作家ジュリアン・グリーンの名前を挙げ、ある思い出を話し始めた。「現存」とは、見ることができず、ふれることもできないが、確かに「存在」することを指す、とマルセルは語った。

彼（グリーン）は私がおそろしい自動車事故のあとで寝ていたとき、会いにきてくれましたが、その時部屋の中に誰かがいる

のを感じると言いました。おそらくは、私
が失った愛する人たちのことなのでしょう。
それは「現存」の一つの特徴なのです。「現
存」として感じられた「現存」、客体化さ
れていない、また、されえないものです。

ここに一切の比喻はない。このときマルセ
ルは「現存」の典型として躊躇なく死者、「生
きている死者」を語っている。マルセルが母
親を喪ったのは、四歳になるうかというとき
だった。以後、彼は母の実妹である叔母に育
てられた。マルセルは育ての親となった叔母
を愛した。だが、同時に実母もまた、彼の魂
のなかで生きつづけた。彼にとって死者はい
つしか疑いのような実在となり、彼の人生
の中軸となった。

キリスト教には「諸聖人の通功」という教
義がある。ラテン語では *communio sanctorum*
と書く。諸聖人 *sanctorum* は、英語の *saints* に
当たり、聖人を意味する。通功を指す
communio は、英語の *communion* (交わり、コ
ミュニオン) の語源である。カトリックでは
「死」を経ることによってはじめて「聖人」
として認められる。聖人は例外なく死者であ
り、「諸聖人の通功」もまた、死者の国であ
る天国、煉獄、そして生者の国である地上界
を貫く、生者と死者の交わりを意味する。

com は、相互に何かを営むことを示す接頭

辞だが、そこに一になること (*union*) が連
なるのが、「コムニオン *communion*」である。
「コムニオン」は「コムニケーション」
同様、「交わり」を意味するが、この言葉は
生者間の交わりに留まらず、生者と死者との、
あるいは死者同志の交通を含んでいる。

また、「コムニオン」には、生者と死者
の交わりは生者間のような対峙の関係ではな
く、関係の癒合が志向されている。生者と死
者は、「死別」したあとでも関係の亀裂を癒
し合うことができる。

キリスト教は、イエスが死んで、イエス・
キリストとして復活したところにはじまる。
復活のキリストの誕生に、時空を超えた永遠
の今を認める信仰だといってもよい。永遠の
今における信徒とキリストとの「共在」の表
象がミサである。

ミサは、イエスの最後の晩餐を再現する。
信徒はそのとき、永遠の食卓に招かれる。そ
こで信徒は、イエスが行ったように「パン」
をキリストの「体」すなわち神の実在の象徴
として受ける。それをカトリックでは「聖体
拝領」というが、それを英語で表わすと
Communion となる。小文字の *communion* が死
者たちとの交わりであるように、*Communion*
の一語は、死者の王であるキリストとの真実
の交わりを表現している。

だが、「諸聖人の通功」では意味が伝わり

にくいということで、今日では、カトリック、
プロテスタントともに「聖徒の交わり」と記
すようになった。平易をねらった、いたずら
な言い換えは、本当の意味をしばしば喪失す
るが、この一語も例外ではない。「聖人」を
認めないプロテスタントにおいてこの言葉は、
いつしか生者である信徒同士交流を示す二
次元的な意味に変じた。

また、本来的には死者の宗教でもあるカト
リックでも、「コムニオン」は次第に「コ
ミュニケーション」化していて、死者の居場
所はどんどん小さくなっている。さらにい
えば死者は生者が祈る対象ではあるが、協同
する同伴者としては認識されていないように
思われる。

「諸聖人の通功」は、生者が死者に対して
祈ることの重要性を示す教理であるより、む
しろ、生者は死者の助けなくしては一日たり
とも生きられない現実を明示している。

先に「諸聖人の通功」を「教理」だと書い
たが、ここでの「教理」とは、組織が定める
狭隘なる教義を意味しない。むしろ、信仰共
同体の伝統のうちに育まれた、無名な信徒た
ちによる真実の経験の告白である。「教会」
は黙しても「死者」は生者に語りかけること
を止めない。それは宗派を超えたところに生
起する。

次に引くコムニオンにふれたマルセルの

一節は、現代日本、特に二〇一一年の東日本大震災以後に生きる私たちにも無関係ではないはずである。

ほんとうの深さというものは、交り^{まじり}が実際に実現されるところにしか存しないものである。ところが、真の交りは、自己中心にかたまり従って硬化症にかかったような個人のあいだでは、決して実現されるものでもないし、大衆のなか、大衆の状態下でも、ありえないであろう。相互主体性の概念は、——わたくしの最近の著作もそこに基礎をおいているのだが——互いに胸襟をひらくことを想定しているのであつて、それなくしてはどんな精神性も考えられないのである。「大衆に對立する普遍」「人間 それ自らに背くもの」小島威彦・信太 正三訳

個として存在するのは、他者との「交わり」によって互いに完成されるためであるとマルセルは指摘する。他とつながるべく開かれていながら、個としての立場を失わないこと、それがマルセルのいう「相互主体性の交わり communion inter-subjective」である。この言葉を批評家・越知保夫は「主体間の交わり」と訳す。

一九五七年秋、マルセルはフランス政府の

文化使節として来日して、各所で講演を行った。自身もカトリックだった越知保夫は、この老哲学者の言葉を聴きもらすまいとでき得る限りの講演に参加した。のちに越知は、その成果を「ガブリエル・マルセルの講演」と題して発表する。

マルセルにとつては、信仰とは、その人の中にあつて、他人の容喙^{ようかい}しえないもの、他人がそれについて論議し是非する権利をもたないもの、一切のverification〔点検〕をこえたものであつた。ところでverifiable〔点検し得る〕であるということ、言いかえれば「なぜ」とか「いかに」とか問うことができ、又答えることができるということがそれが実在するということではない。inverifiableなもの、点検しえないものの実在性、いわば超越性の実在性ということが、彼の確認したいことであつたのである。彼はそれを《Je ne sais pas ce que je crois》「私は私の信じているものを知らない」という言葉に定式化しようとしている。そしてこれが、彼の「盲目にされた直観」という言葉の意味であると考えられる。

「容喙」とは、他者が不用意に云々し、口出しすることである。マルセルにとつて信仰とは他者によつてはふれ得ないものだと思

はいう。状況は彼自身にとつても同じだろう。マルセルはその実感を「私は私の信じているものを知らない」という言葉に定式化しようとしたのだつた。

マルセルは、越知がもつとも信頼した同時代の哲学者である。そうした人物の言葉を引用するとき、そこに籠められている意図は、共感の表明であるより、靈性の一致だと考えてよい。

越知保夫の作品中、もつとも優れたものの一つが「小林秀雄論」である。そこで彼は小林とマルセルの思想的接近が著しいことを論じた。彼の着想の正しさを証明するように後年、先に見た小林秀雄との対談が実現した。しかし、それを越知は知らない。それが行われたのは、彼の没後五年が経過したときだつた。小林とマルセルをつなぐものを、越知は二人が共に感じていた死者の臨在であるという。

マルセルは一切の虚無である「死」を承認させようとする誘惑に抵抗して「死」を拒否したのであるが、小林（秀雄）の場合も根底にはやはり「死」の拒否がある。両方とも母の死に直面し、信仰という問題に端的にふれていることは注目すべきことである。突込んで言うならば、亡くなった母親と我々との間には、生きた或る絆がある。

その絆は、生きていた時よりも、母が死んだ後に一層はつきりと感じられるものかもしれない。マルセルの言う、「生とのinput」な契り」もこれを指すのであろうか。それは我々の中にあつて我々自身にすら手をふれることができない部分であり、一切の論議を超えたものである。しかも我々の思想も感情もすべてこの我々の中にあつて我々自身を超えた或る神秘によつてはじめて意義をもつのである。それをマルセルは敬虔Deusとよんでいる。(越知保夫「ガブリエル・マルセルの講演」)

生者は、真に死者を感じたとき、不可避的に畏敬と「敬虔」の念を覚える。越知はまた、「マルセルは、etre present(現に在る)とは、etre avec(共に在る)ことであるとも言ふ。プレザンス「存在の根源」にふれるとき、私たちをみたすものは、こうした「共在」の感情である」とも書いている。彼らにとつて死者は、論じ解析する対象ではなく、常に交わる他者だった。いつも私たちと共にありながら、また、私たちの認識を超えるものだった。ある時期までマルセルは無神論者だった。彼自身によると「一九二九年の二月から三月にかけて」「回心」する。「回心」は「神」に心を向き直すことであつて、「改心」とは異なる。「回心」はconversionの訳語だが、この

原語もconvert、すなわち向きを変えることを含意している。むしろ、「回心」とは、「罪人」のままでありながら、自らを照らす光を無視し続けることができず、超越者に向き合い直すことである。それは哲学者として世に認められるようになって以後の出来事だった。

「回心」があつて、コミュニオンが生まれたのではなかった。マルセルの場合、コミュニオンは信仰に先んじてあり、信仰はコミュニオンが霊性の伝統であることを彼に示した。「自分がカトリック者であるということは、カトリシズムが世界主義であり、その世界性が、それ以外の宗教意識の表現形態に対してもある理解(無論、単なる寛容ではない)の態度を示すというかぎりにおいてである」というマルセルの言葉を越知保夫は「ガブリエル・マルセルの講演」に引いている。さらに自伝(『道程』)でマルセルは、われわれカトリックは、と言ふとき私たちは「普遍」の埒外にある、とも述べた。「われわれカトリック」と発言した途端、自己のとなりカトリックならざる者を産み出し、その行為は真実の意味における「普遍」からは遠ざかる。普遍を志向する哲学は、いつも個の切実な体験からしか生まれ得ない。だが、独我的になるとき、人は主体的ではありえない。自己の主体性を証するのは他者にほかならない、というのである。「主体性」とマルセルが記

すとき、そこに示されているのは「客観主義に対する主観主義というようなもの」ではなく、「個人的individualなもの」を抽象的な一般性の中に解体してはならぬということ」への慎重な注意である、と越知は指摘する。

眼前の他者と永遠の他者に向かつて開かれながら思索を深めること、それがマルセルにとつての哲学であり、また、越知保夫にとつての文学だった。この地平ではすでに、文学と哲学を隔てるものは存在しない。事実、マルセルは論文を書きながら、多くの戯曲を書いた。そして晩年に著した自伝では、後世にとつて見いだすべきものがあるとするれば、同時代人たちが余技だとみなして、十分に顧みなかった戯曲にあるように感じられるとすら語った。

ある講演でマルセルは、「文学自身の中に哲学的思想が深く滲透している現在、文学と哲学との間に何らの境界を設けることが実際に不可能」であるとの言葉も残している。

現代において文学のなかに真に形而上学と呼ぶべき何か潜んでいるなら、本当の意味で宗教と呼ぶべき何ものかもまた、世が宗教的というのは別なところに生起しているのではないだろうか。信仰者とは、それを野に見いだそうとする者の謂いである。

著書に「魂にふれる (わかまつ えいすけ・批評家 大震災と生きている若者) トランスビュー